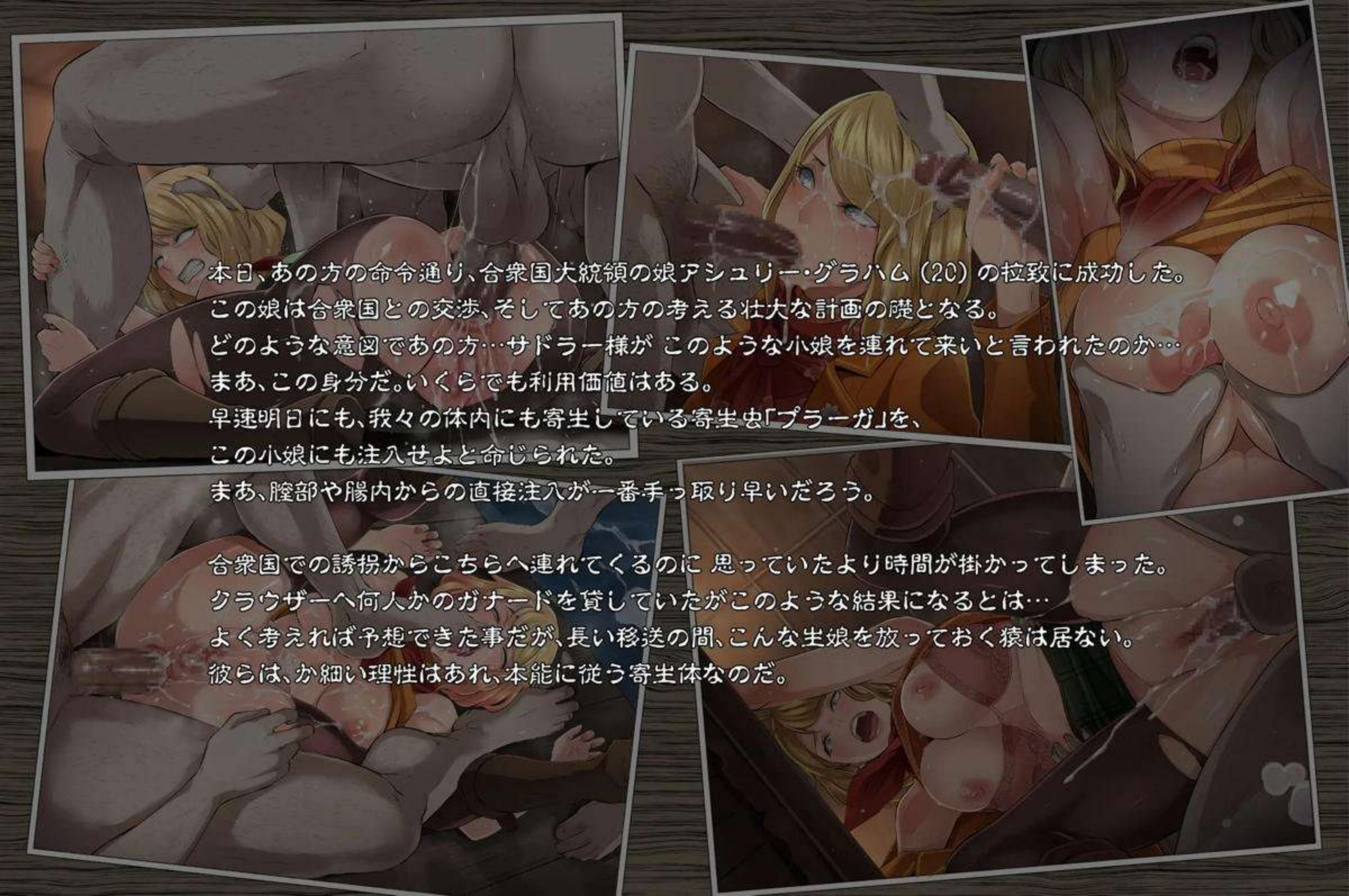
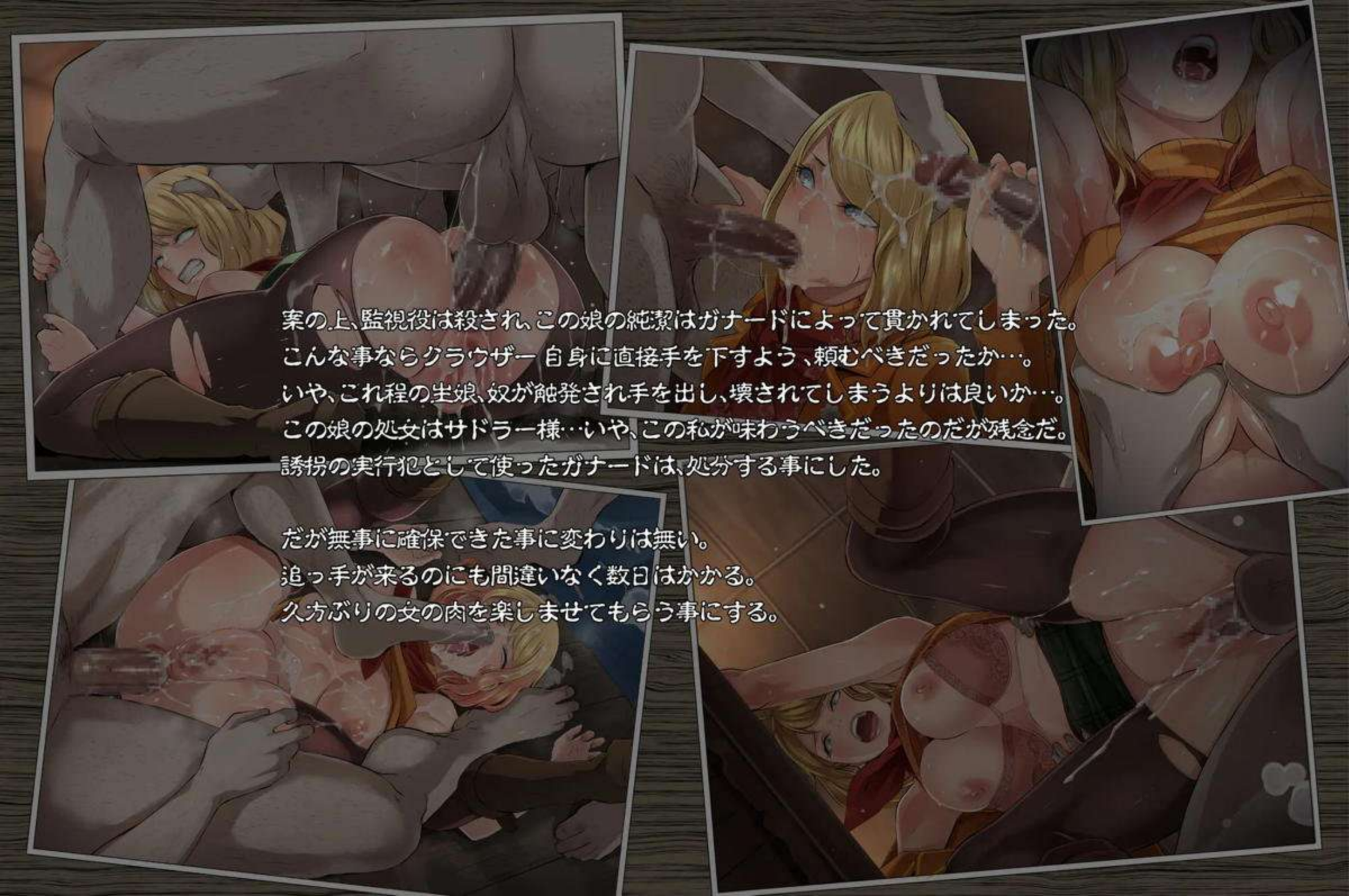
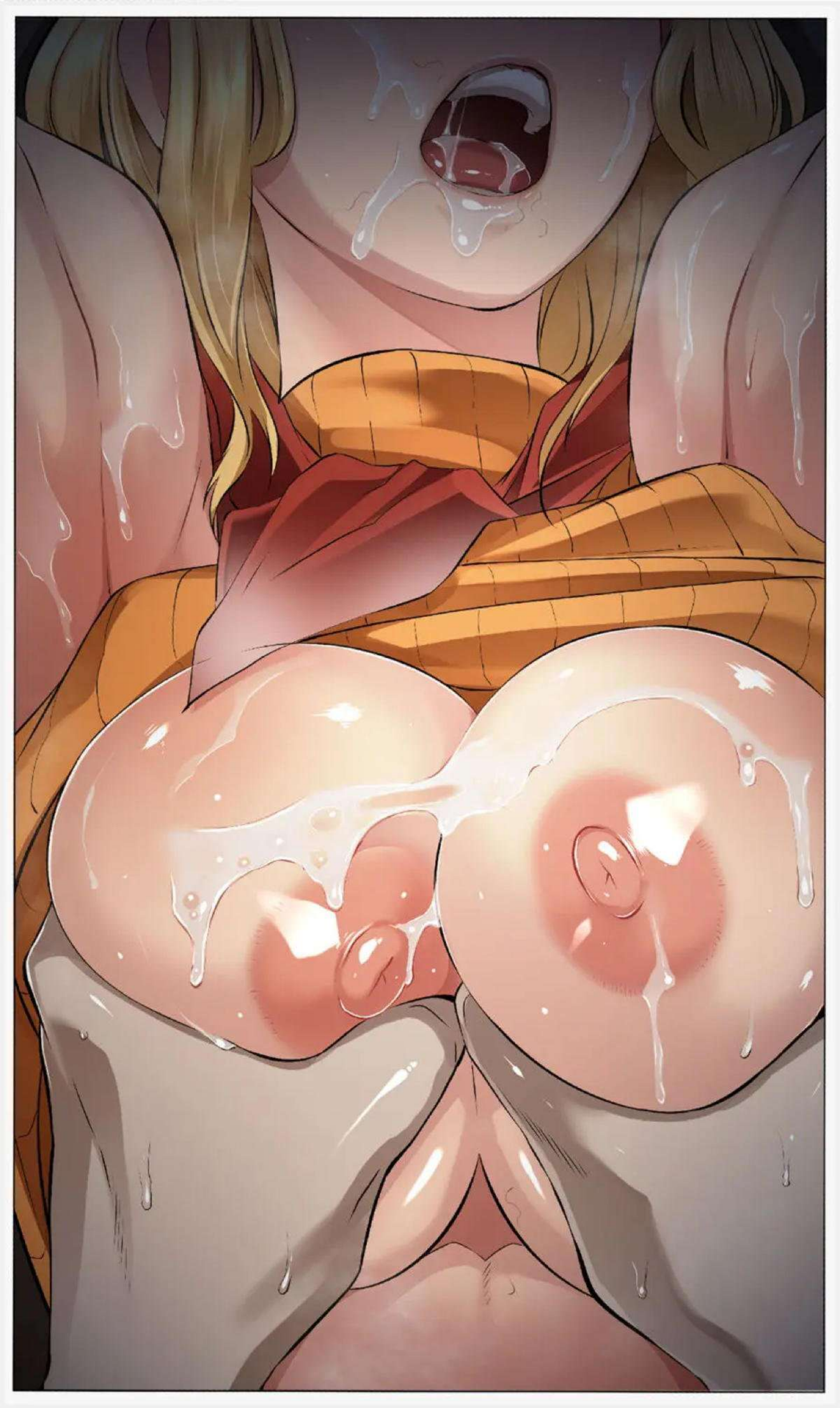
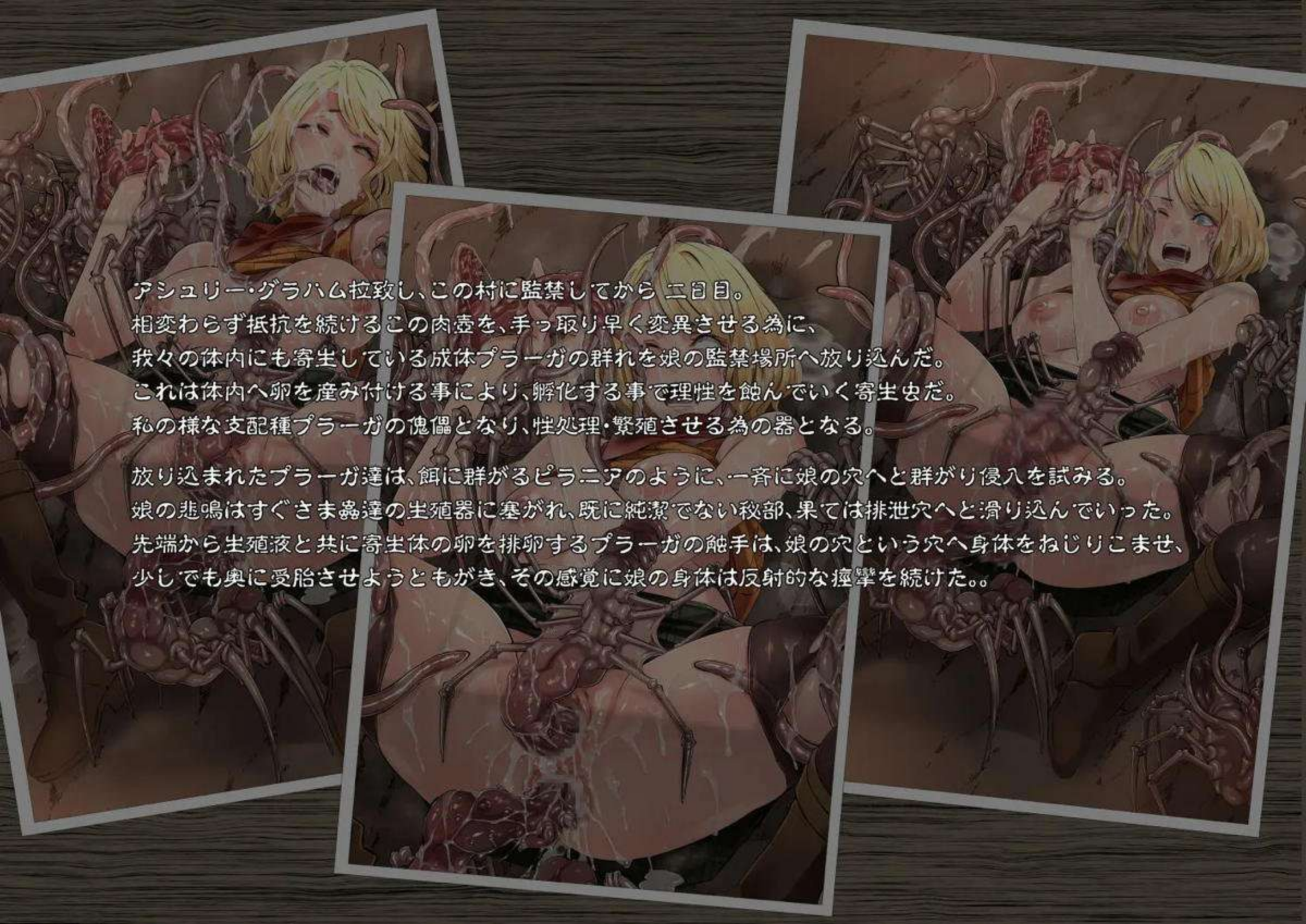

本日、あの方の命令通り、合衆国大統領の娘アシュリー・グラハム（20）の拉致に成功した。
この娘は合衆国との交渉、そしてあの方の考える壮大な計画の礎となる。
どのような意図であの方…サドラー様が このような小娘を連れて来いと言われたのか…
まあ、この身分だ。いくらでも利用価値はある。
早速明日にも、我々の体内にも寄生している寄生虫「プラーガ」を、
この小娘にも注入せよと命じられた。
まあ、膣部や腸内からの直接注入が一番手っ取り早いだろう。
合衆国での誘拐からこちらへ連れてくるのに 思っていたより時間が掛かってしまった。
クラウザーへ何人かのガナードを貸していたがこのような結果になるとは…
よく考えれば予想できた事だが、長い移送の間、こんな生娘を放っておく猿は居ない。
彼らは、か細い理性はあれ、本能に従う寄生体なのだ。

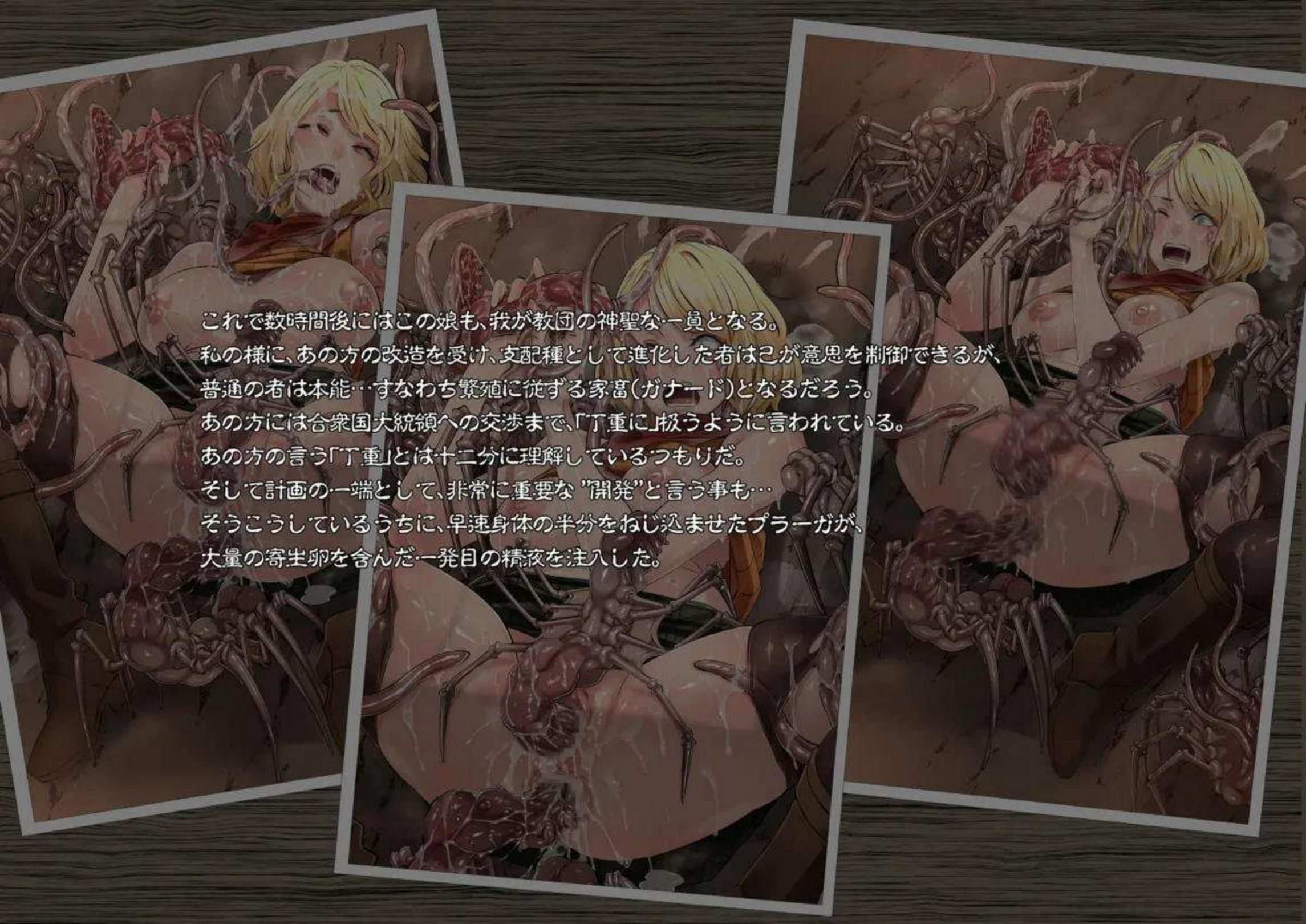

案の上、監視役は殺され、この娘の純潔はガナードによって貫かれてしまった。
こんな事ならクラウザー自身に直接手を下すよう、頼むべきだったか…。
いや、これ程の生娘、奴が触発され手を出し、壊されてしまうよりは良いか…。
この娘の処女はサドラー様…いや、この私が味わうべきだったのだが残念だ。
誘拐の実行犯として使ったガナードは、処分する事にした。
だが無事に確保できた事に変わりは無い。
追っ手が来るのにも間違いなく数日はかかる。
久方ぶりの女の肉を楽しませてもらう事にする。





アシュリー・グラハム拉致し、この村に監禁してから 二日目。
相変わらず抵抗を続けるこの肉壺を、手っ取り早く変異させる為に、
我々の体内にも寄生している成体プラーガの群れを娘の監禁場所へ放り込んだ。
これは体内へ卵を産み付ける事により、孵化する事で理性を蝕んでいく寄生虫だ。
私の様な支配種プラーガの傀儡となり、性処理・繁殖させる為の器となる。

放り込まれたプラーガ達は、餌に群がるピラニアのように、一斉に娘の穴へと群がり侵入を試みる。
娘の悲鳴はすぐさま蟲達の生殖器に塞がれ、既に純潔でない秘部、果ては排泄穴へと滑り込んでいった。
先端から生殖液と共に寄生体の卵を排卵するプラーガの触手は、娘の穴という穴へ身体をねじりこませ、
少しでも奥に受胎させようともがき、その感覚に娘の身体は反射的な痙攣を続けた。。

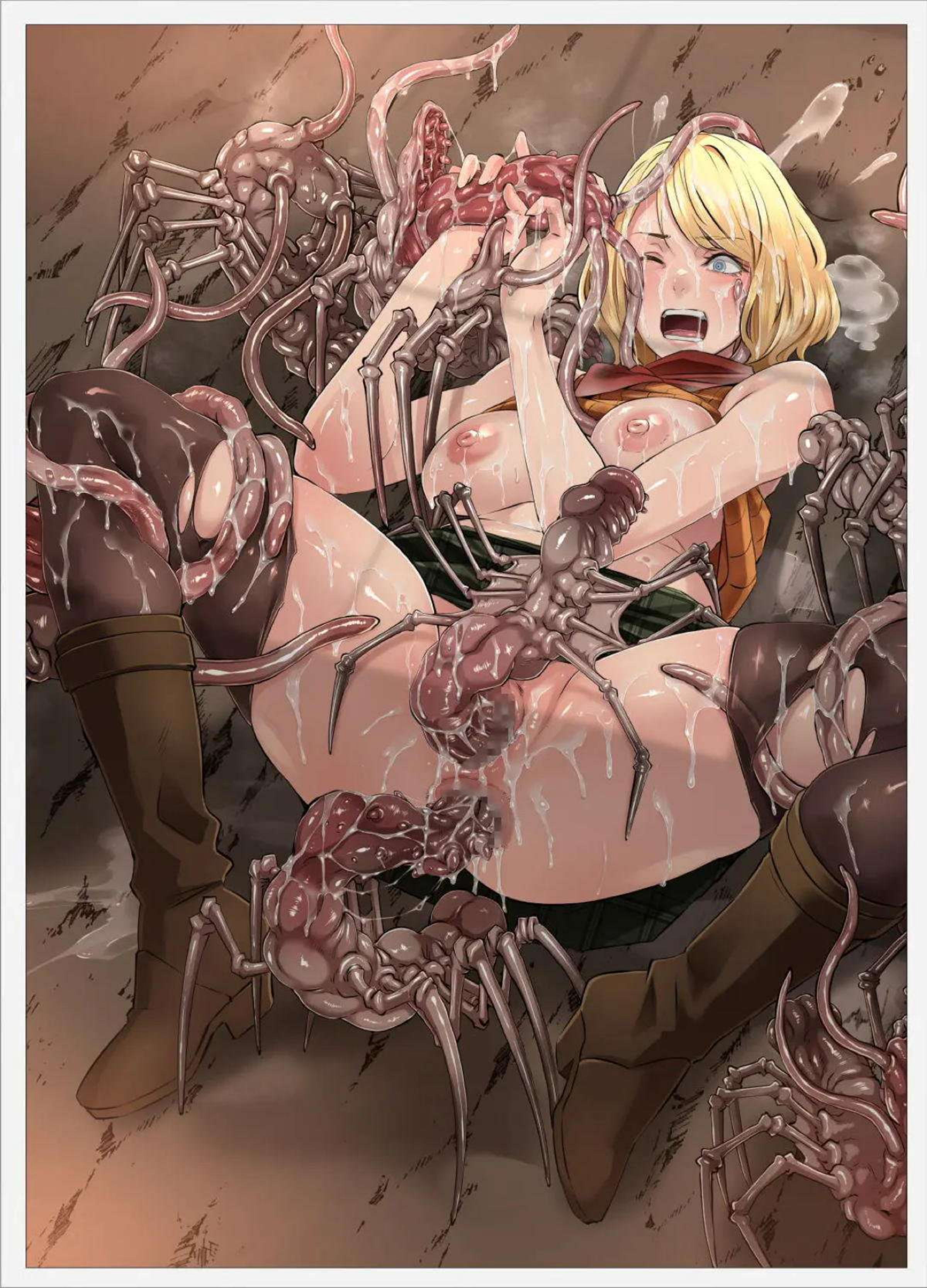


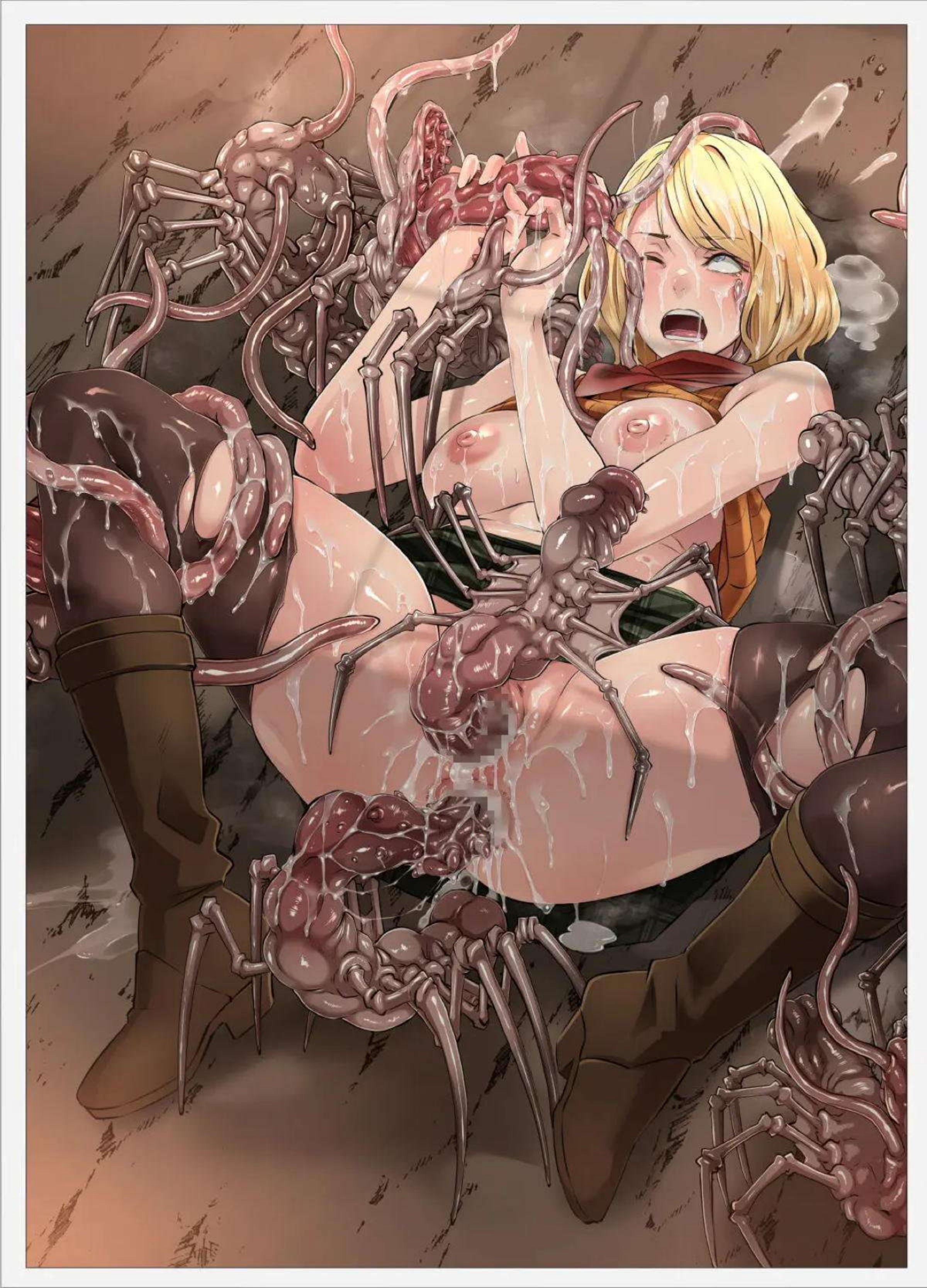
これで数時間後にはこの娘も、我が教団の神聖な一員となる。
私の様に、あの方の改造を受け、支配種として進化した者は己が意思を制御できるが、
普通の者は本能…すなわち繁殖に従ずる家畜(ガナード)となるだろう。
あの方には合衆国大統領への交渉まで、「丁重に」扱うように言われている。
あの方の言う「丁重」とは十二分に理解しているつもりだ。
そして計画の一端として、非常に重要な"開発"と言う事も…
そうこうしているうちに、早速身体の半分をねじ込ませたプラーガが、
大量の寄生卵を含んだ一発目の精液を注入した。

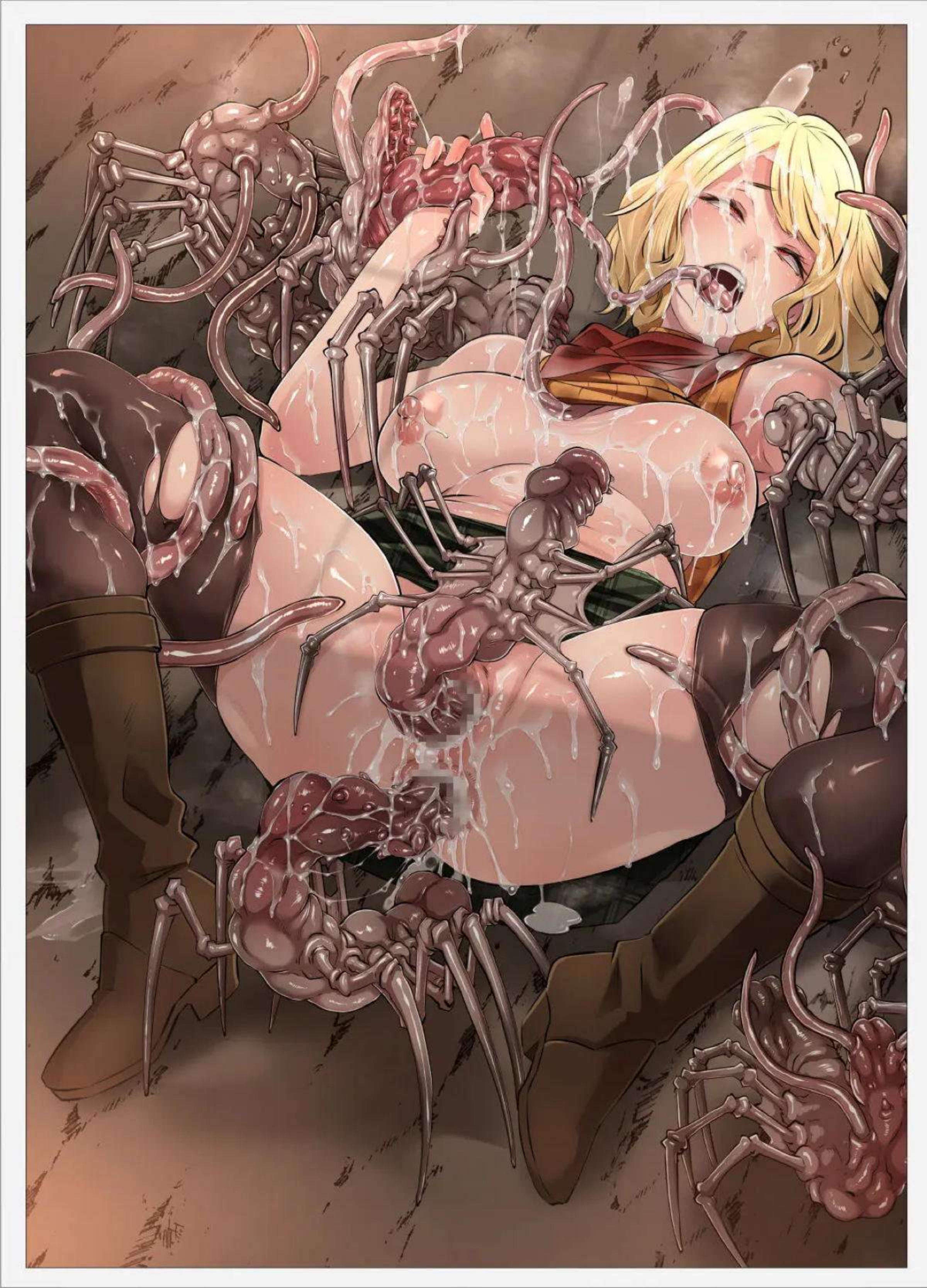
あれから数時間。
一匹目の寄生体が孵ったのか、娘の態度に変化が生じ始めた。
卵巣の排卵を促進する精液に含まれた即効性の催淫効果も功を奏し、
休みなく射精を試みるプラーガ達を催促するさまに、意識が無くとも尻を振り始めている。
効果は抜群だ。
彼女の中で孵った寄生虫は、彼女の細胞と同化しながら徐々に人ならざる者へと肉体を"改良"していく
孵化したプラーガの幼体は、苗床の内臓に流し込まれる生物の雄の種…精子を糧として成長する。
寄生体を成長させるには、とにかく大量の精液を体内に注入させる必要がある。
プラーガでの直接注入、または我々寄生者からの体液注入が最も効果的だ。
私や一部のガナードの様に、強力な力を持つ個体の体液はもっと良い。
強力な寄生体の種と受精し繁殖したプラーガは、さらに強力な寄生体として産み出される。

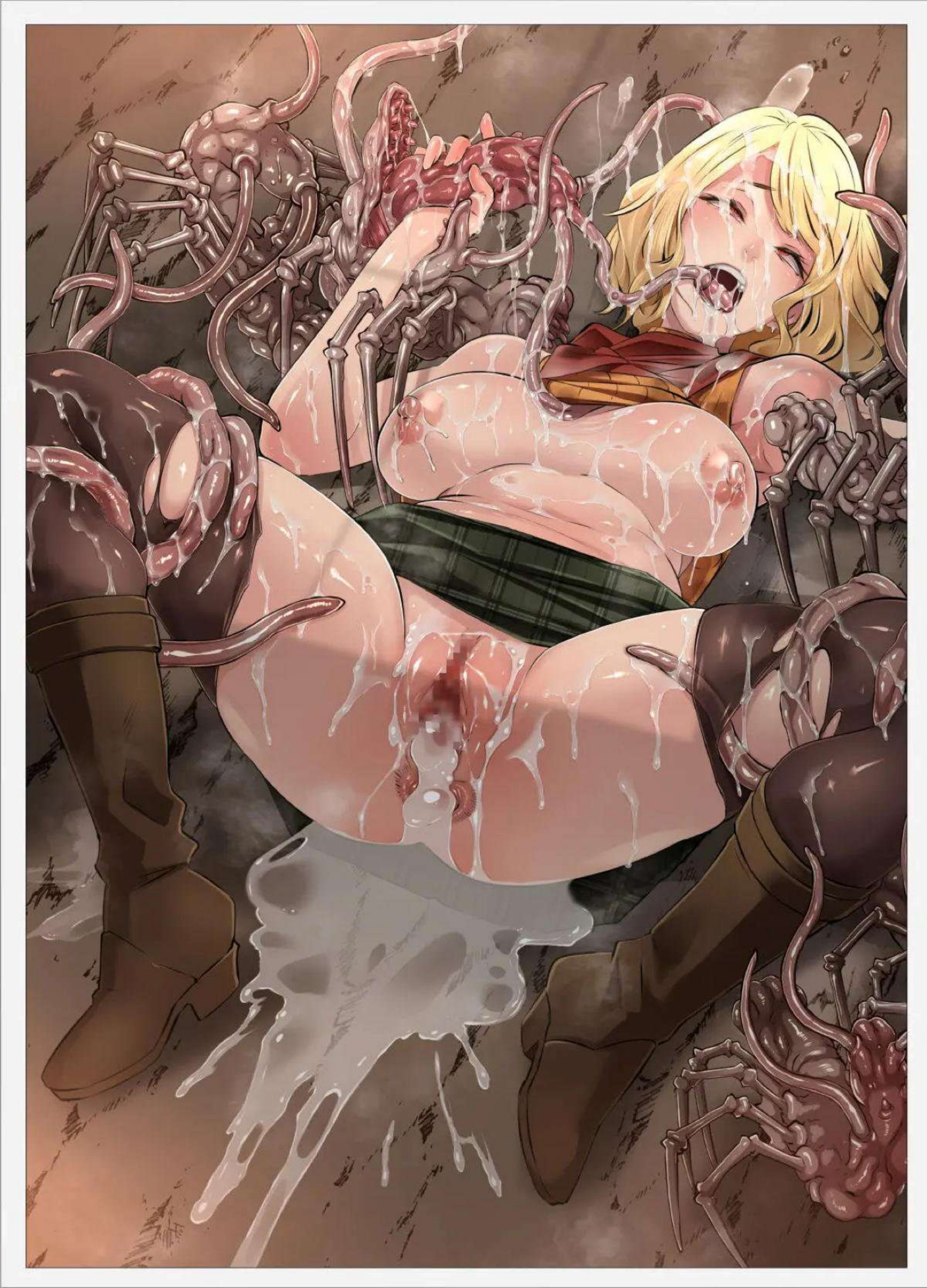
まだ不完全とはいえ、既に寄生者となった器。
多少の繁殖では壊れない身体へと改良されたはずだ。
この村に居る様々な寄生体を試し、寄生を確実なものにする。

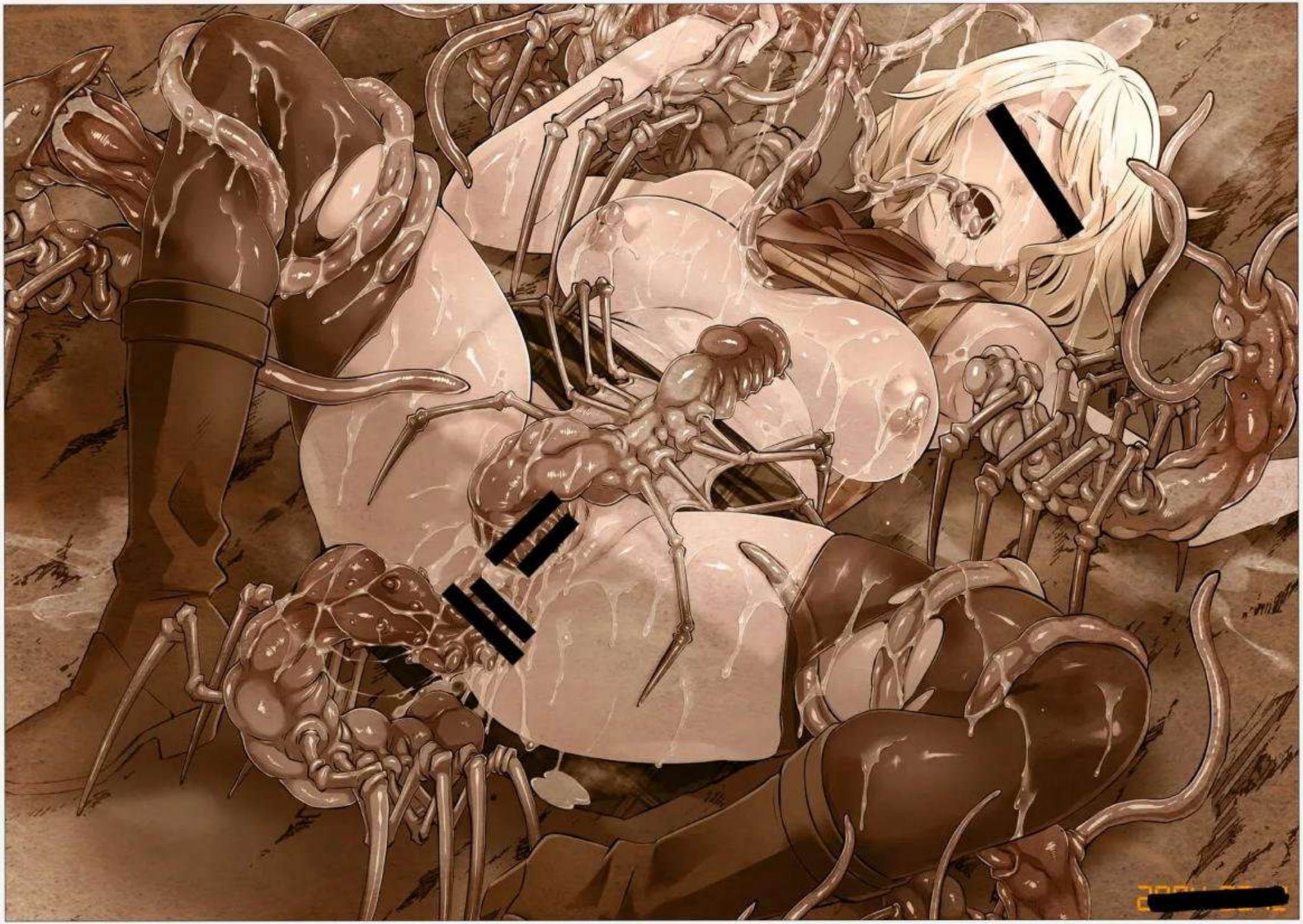
明日からまた、忙しくなりそうだ。

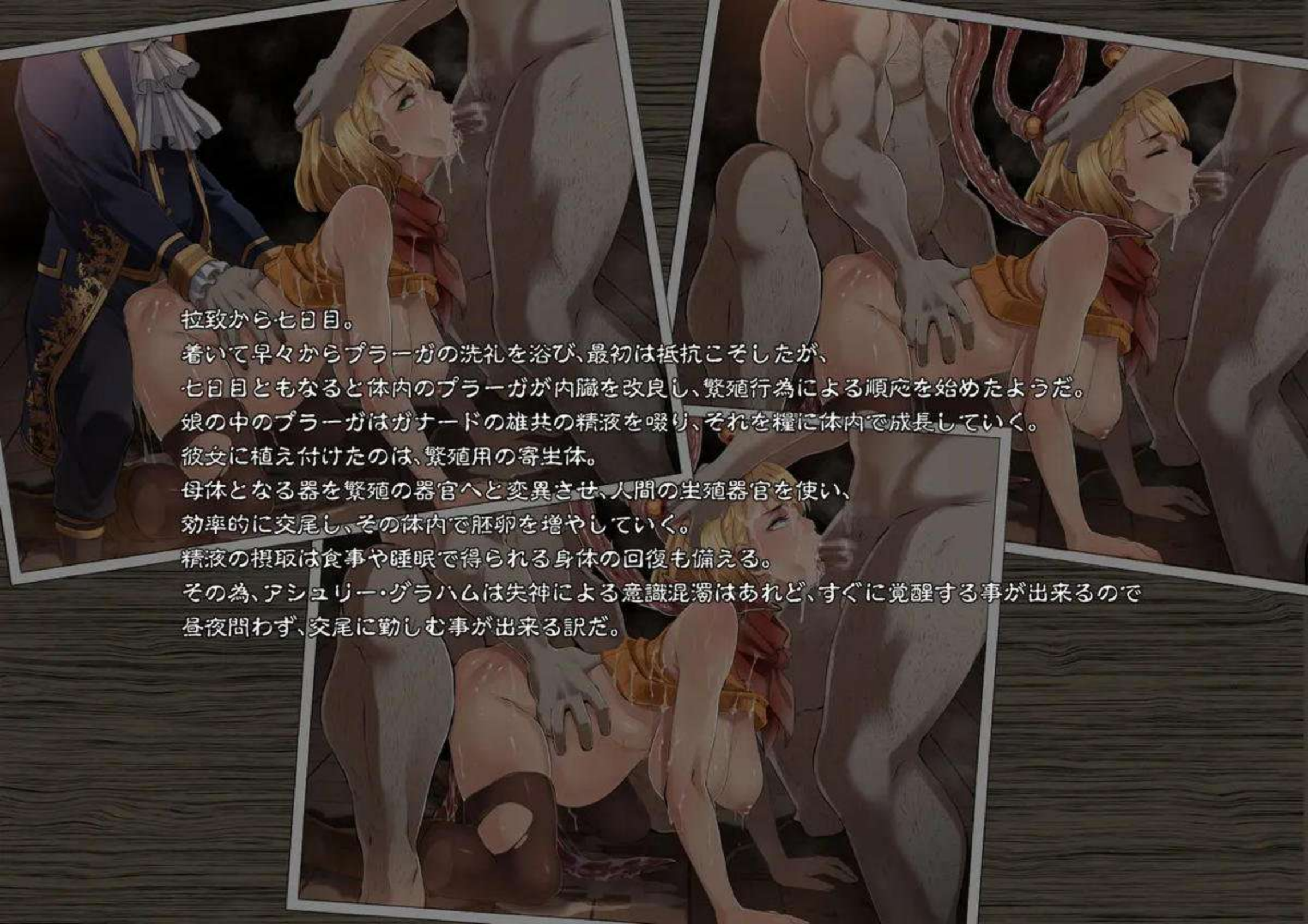






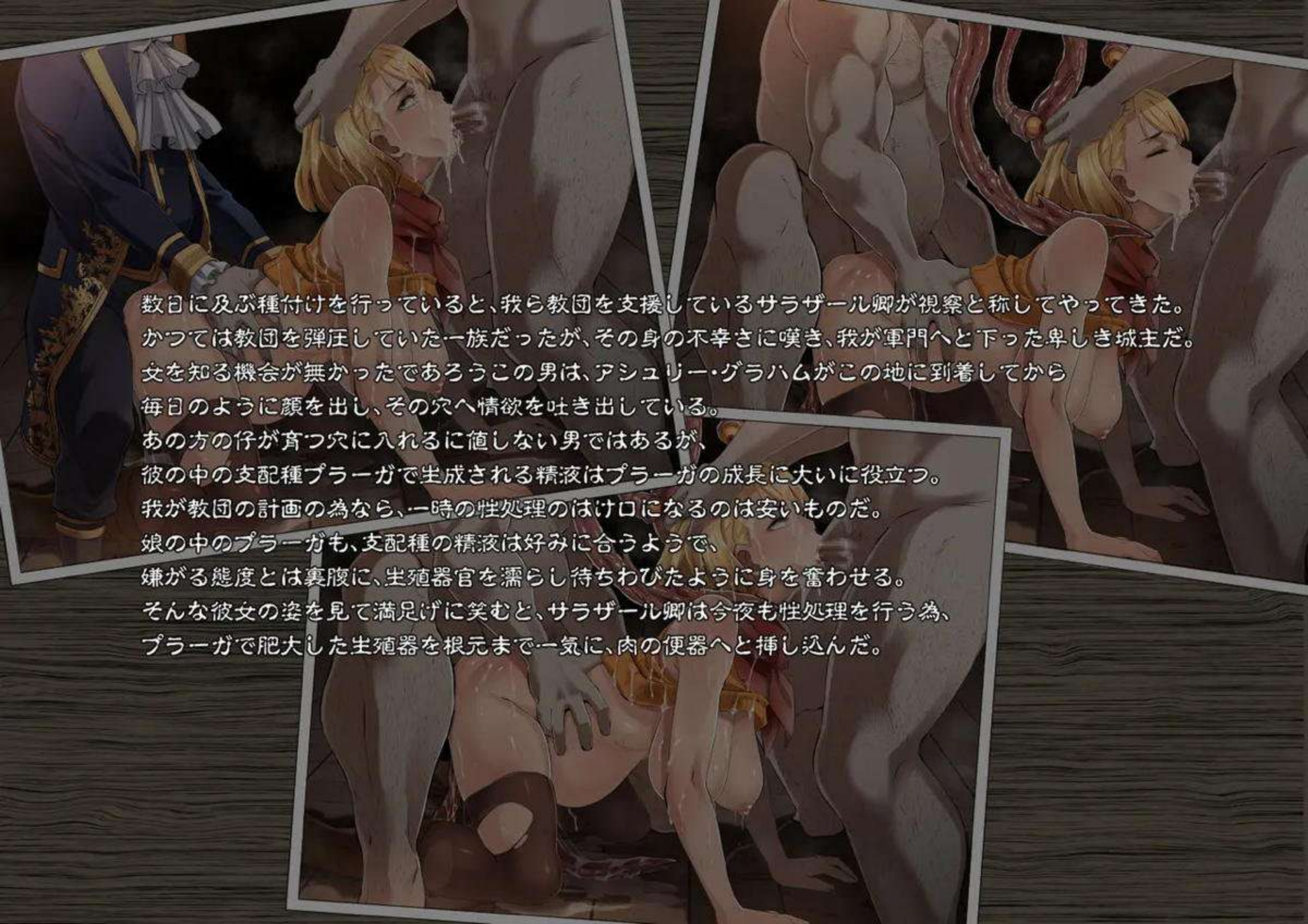




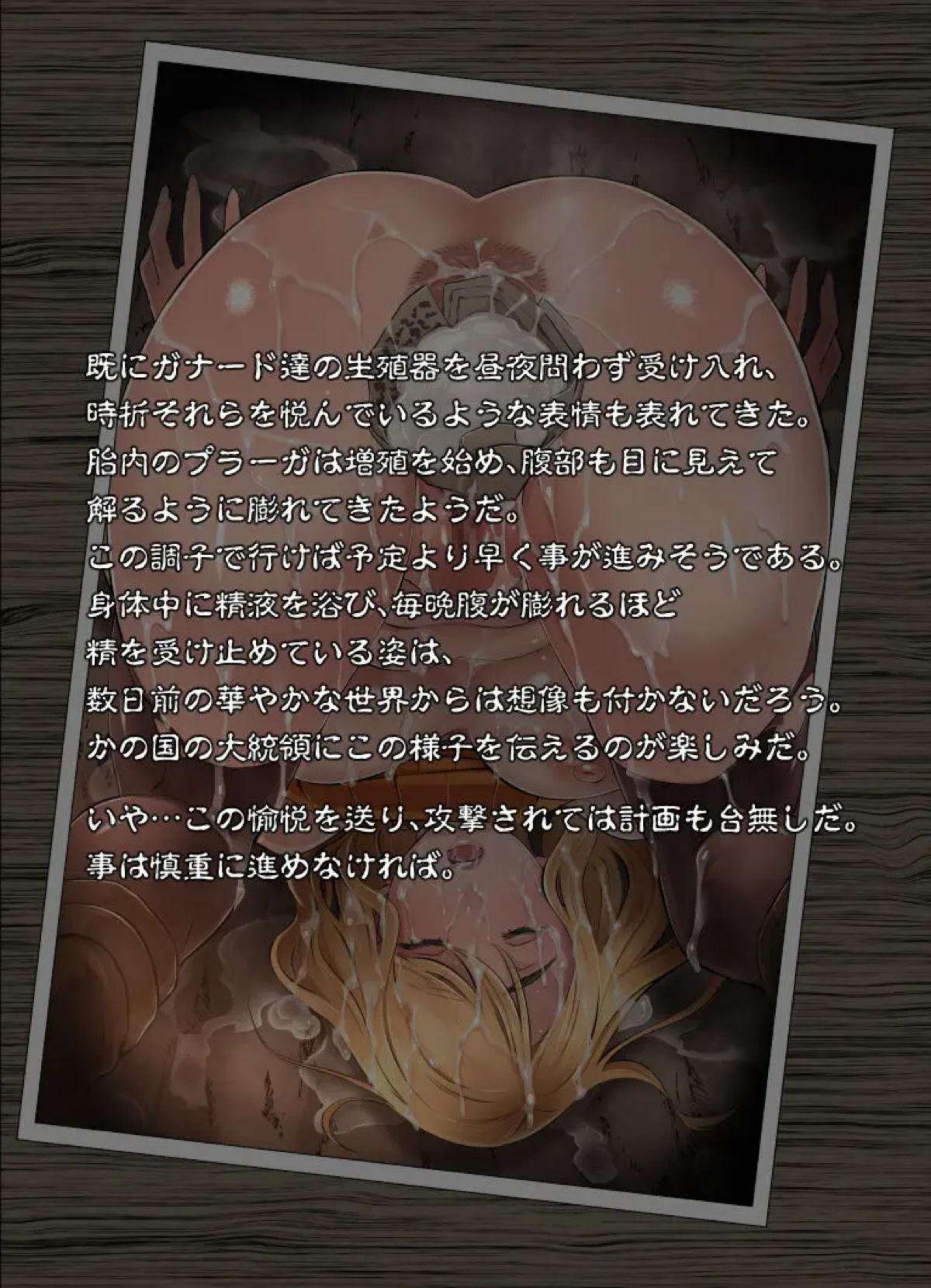
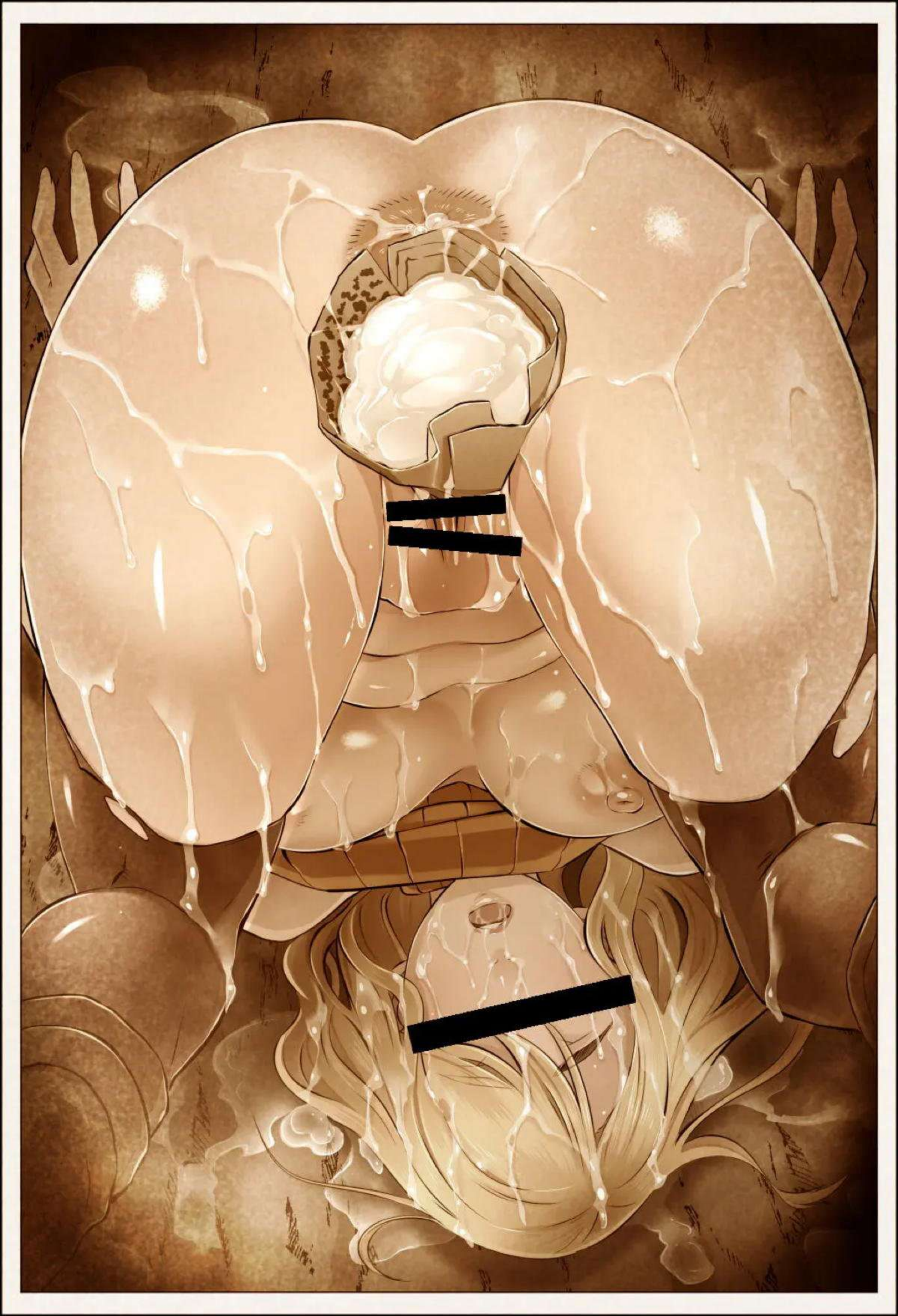


拉致から七日目。
着いて早々からプラーガの洗礼を浴び、最初は抵抗こそしたが、
七日目ともなると体内のプラーガが内臓を改良し、繁殖行為による順応を始めたようだ。
娘の中のプラーガはガナードの雄共の精液を啜り、それを糧に体内で成長していく。
彼女に植え付けたのは、繁殖用の寄生体。
母体となる器を繁殖の器官へと変異させ、人間の生殖器官を使い、
効率的に交尾し、その体内で胚卵を増やしていく。
精液の摂取は食事や睡眠で得られる身体の回復も備える。
その為、アシュリー・グラハムは失神による意識混濁はあれど、すぐに覚醒する事が出来るので
昼夜問わず、交尾に勤しむ事が出来る訳だ。

人間の雌の内臓は実に繁殖に適している。
胃腸はプラーガ幼体を生む卵を繁殖させる器官とした。
食道や排泄穴から効率的に精液を摂り入れ、胃や腸の中で分裂し、肛門から排出させる。
子宮は遺伝子混合プラーガの母胎として機能させ、私やあの方の仔を産む器となる。
未だ理性の残る肉壺へ、その事実を伝えた時の表情は今でも鮮明に覚えている。



数日に及ぶ種付けを行っていると、我ら教団を支援しているサラザール卿が視察と称してやってきた。
かつては教団を弾圧していた一族だったが、その身の不幸さに嘆き、我が軍門へと下った卑しき城主だ。
女を知る機会が無かったであろうこの男は、アシュリー・グラハムがこの地に到着してから
毎日のように顔を出し、その穴へ情欲を吐き出している。
あの方の仔が育つ穴に入れるに値しない男ではあるが、
彼の中の支配種プラーガで生成される精液はプラーガの成長に大いに役立つ。
我が教団の計画の為なら、一時の性処理のはけ口になるのは安いものだ。
娘の中のプラーガも、支配種の精液は好みに合うようで、
嫌がる態度とは裏腹に、生殖器官を濡らし待ちわびたように身を奮わせる。
そんな彼女の姿を見て満足げに笑むと、サラザール卿は今夜も性処理を行う為、
プラーガで肥大した生殖器を根元まで一気に、肉の便器へと挿し込んだ。


既にガナード達の生殖器を昼夜問わず受け入れ、
時折それらを悦んでいるような表情も表れてきた。
胎内のプラーガは増殖を始め、腹部も目に見えて
解るように膨れてきたようだ。
この調子で行けば予定より早く事が進みそうである。
身体中に精液を浴び、毎晩腹が膨れるほど
精を受け止めている姿は、
数日前の華やかな世界からは想像も付かないだろう。
かの国の大統領にこの様子を伝えるのが楽しみだ。
いや…この愉悦を送り、攻撃されては計画も台無しだ。
事は慎重に進めなければ。